

# トルコ共和国における アレヴィーの宗教舞踊セミナー

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 米山 知子

# トルコ共和国における アレヴィーの宗教舞踊セマー

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 米山 知子

本発表では、報告者が研究を進めているトルコ共和国におけるアレヴィーの宗教舞踊セマーについて報告する。

アレヴィー Aleviは、かつてのオスマン帝国領内、特に現在のトルコ共和国（アナトリア地方）およびその周辺に多く居住していた。それぞれ居住場所によって呼び名は異なるが、トルコ共和国内では、現在一般にアレヴィーと呼ばれている。「アレヴィー」という名称は、イマーム・アリーを崇拝するという彼らの信仰上の主たる特徴をもとに、20世紀前半頃から外国人研究者によって名づけられ、それを逆輸入する形で当事者たちも自称するようになった。また彼らは、イスラーム教スンニー派が多くを占めるトルコ共和国において宗教的マイノリティーと言われながらも、その人口は今だ明らかではないが、共和国全人口約6800万人のうち500万～2000万人いるとされる。

宗教的な理由から迫害、偏見の目で見られることの多かったアレヴィーは、EU加盟を意識したトルコ政府が1990年以降にマイノリティーの権利に対する規制を緩和したことにより、アレヴィーに対する偏見の払拭および、これまで表に出すことの困難であった「アレヴィー文化」の普及・保持を目的に、移住先のイスタンブールなどの都市において多くのアレヴィー文化協会を組織した。そこでは、ジェムと呼ばれる儀礼の中で行われ、アレヴィーの象徴であると共にアレヴィー性Alevilik(文化・信仰)を構成する重要な要素である宗教舞踊セマー Semahとその音楽が、上記のような目的を遂行するために特に盛んに用いられている。

そこで発表者は、都市におけるアレヴィー文化協会の主な活動のひとつであるセマー教室に焦点を当て、教室参加者とともにセマーを習得し、その活動を追った。それによってみえてきたことは、これまで儀礼でのみ実践されてきたセマーは、時代の波に乗り現在では主に5つの場で実践されるようになっている、ということである。第一にジェムの中での実践という「儀礼の場」、第二に都市の協会のセマー教室における「練習の場」、第三にイベントなどの「公演の場」、第四にVCDやテレビ番組、写真など「商品」としての場、最後に結婚式や個人宅などのプライベート空間における実践の場、である。このように広がりを見せるセマー実践の場であるが、担い手たちはどの場で行われようと、それは「神への愛」であり、「舞踊」ではないのだと口をそろえて語る。明らかに人へ見せることを意識したイベントなどの会場での実践も、彼らにとっては「信仰＝神への愛」なのである。

儀礼以外の場では実践してはならないという信仰上の教えから逸脱し、現在さまざまな場でセマーを実践しているアレヴィーは、場にさまざまな装置を用いその解釈を可能にしている。また、5つの「場」同士も相互に補完しあいながら、これまでの偏見や迫害の歴史を払拭し、一般トルコ社会になじむことも助けているのである。そして、場の広がりにより、セマー、すなわちアレヴィー文化を共有する人が増加し、「想像の共同体」が出来上がっているのである。